

論文

大学生における新型コロナウイルス感染症による生活の変化とストレス (2)

～男女比較を中心にテキストマイニングによる学生の自由記述の分析～

有木 永子^{※1}・伊坂 裕子^{※1}Lifestyle Changes and Stress Due to COVID-19 Among University Students in Japan
: An analysis of open ended surveys by text mining with a focus on gender comparisonNagako ARIKI^{※1} and Hiroko ISAKA^{※1}

ABSTRACT

The purpose of this study was to exploratively examine the stress status and thoughts of university students whose lives were changed by the Covid-19.

A psychological stress response scale (“depression,” “anger,” “fatigue,” and “physical discomfort”) and a free-text questionnaire were administered, and text mining was conducted on the latter. The results showed that (1) women had significantly higher stress response scores on all subscales than men, and especially higher scores on feelings of physical discomfort and fatigue. (2) Regarding “thoughts about the current situation,” the words that were commonly related to the current situation were “corona,” “virus,” “infection,” “now,” “think,” “feel,” “class,” “online,” “life,” “self,” “friend,” and “early”. It is possible that the difference in the way they perceived the changes in their lives forced by the Covid-19 expansion caused the different levels of stress.

1. はじめに

2020年1月に日本で初めて感染報告された新型コロナウイルス感染症は、瞬く間に国内に拡大し、多くの国民が生活上の変化を強いられることとなった。

教育現場における変化もその一つである。小学校・中学校・高等学校は2020年2月末より全国一斉休校となり、児童・生徒は自粛生活が求められた。すでに授業が終了していた大学では、学修機会を確保すべく、翌4月からの授業形態を遠隔授業へ変更する準備が一気に広がった。

また、大学生は移動距離が長く、授業のみならずアルバイトや課外活動など人との接触頻度が高いことから、キャンパスへの立ち入りが制限された。感染状況は刻々と推移するため、教育機関は

地域の状況を鑑みて方針変更が余儀なくされてきた。とりわけ大学は、構成員が複数県にまたがって居住することが多く、人数も多い。それゆえ、対面授業についても、リスクを軽減する方策を模索せざるを得なかったという背景がある。

特に2020年はワクチン接種が開始される前だったため、そのウイルスの伝搬に若者の動きが取り上げられた。大学生もその対象とされ、より一層、自粛生活を求められることとなったのである。

では、こうした社会情勢は、大学生の生活へ具体的にどのような影響を及ぼしたのであろうか。

まず学業面では、多くの大学でオンライン上での授業や課外活動が導入された。約1700名を対象とした文部科学省(2021)の調査によれば、①2020年後期に履修した授業のうち、オンライン授業が

※1 日本大学国際関係学部国際教養学科 教授 Professor, Department of International Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

ほとんど又はすべてだったと回答した学生は全体の6割であったこと、②全体的な満足度としては不満を感じる割合(24.6%)より満足を感じる割合(37.9%)の方が多かったこと、③オンライン授業について良かった点には(複数回答可)「自分の選んだ場所で授業を受けられること」(79.3%)「自分のペースで学修できること」(79.3%)が多く回答された一方で、悪かった点には「友人と受けられない」(53.0%)「レポート等の課題が多い」(49.7%)「質問等双方向のやりとりの機会が少ない」(43.9%)「対面授業より理解しにくい」(42.7%)」という回答が多かったことが示されている。オンライン授業の満足感は、不満感を上回っているが、対面授業の割合が高いほど「大学生活が充実している」とする回答が多い報告(全国大学生生活協同組合連合会, 2021a)もある。特に1年生は大学登校日数が多い程、大学生活が充実している傾向が認められている。

個々のケースでは、多すぎる課題に対応できなくなったり、誰とも交流できないままに受講し続ける不安感に苛まれたりして、モチベーションが維持できなくなる学生が見受けられる。オンライン授業では「対面授業と異なり、教員も学生も集中力を維持することが難しいことがわかってきており」(渡邊, 2020) コロナ前とは違った、学業を継続するための工夫が必要となってきた。

経済面では、度重なる緊急事態宣言の発出により、多くのアルバイト先が休業して収入が断たれたり、家計の急変が生じたり、経済的困窮に苦しむ者が増加した(全国大学生生活協同組合連合会, 2021a)。これらに対して、文部科学省による高等教育の修学支援新制度をはじめとした「新型コロナウイルス感染症の影響で学びの継続が困難となっている学生等の経済支援」や日本学生支援機構による数々の奨学金制度、そして各大学による独自の緊急支援奨学金など、学業継続のための支援策が講じられてきた。先述した文部科学省の調査(2021)によれば、①支援を受けていない学生が約5割で、そのうち4分の3が「支援の必要がない」と回答していることや、②約15%の学生が、支援策がよく分からない等により、必要だったが申請に至らなかったことがわかったという。

個々のケースでは、申請のための証明書が準備できないなど制度を利用できない大学生も散見され、これらの施策が必ずしも困窮者に届けられているわけではない。宣言が解除されると、これまでの困窮を回復させるべくアルバイト勤務時間を増やすこととなり、学業が追い付かなくなってしまうこともある。このように、新しい学修方法の導入や不安定な経済状況が大学生の生活に影響を与えていると考えられる。

一方、心身面では、長引く自粛生活において不安が高まり、ストレスを感じる学生が増加している(渡邊, 2020; 藤井, 2021)。Covid-19が大学生のメンタルヘルスに悪影響を及ぼしたことは世界的に見ても明白であるが(梶谷ら, 2021)、コロナ禍で大学生はどのようなストレス反応を出現させ、どのような思いで生活しているのだろうか。

藤井(2021)は大学生を対象に(n=90)学生版Covid-19感染拡大不安尺度(暫定版)を開発し、コロナ禍における大学生の不安は自粛生活、感染状況、大学生生活全般、経済的問題、部活、将来の6つから構成されとした。大学生の不安水準には男女差が見られないものの、不安と抑うつに関連性について、男性は経済的不安と、女性は自粛生活不安と抑うつ傾向の間に強い関連があることを報告している。

また、同報告(藤井, 2021)では、自己記入式抑うつ尺度DSRS-Cの結果から、2020年11月にうつ傾向が強く何らかの医学的支援が必要と判断される大学生の割合は、男性が19.15%、女性が36.59%、全体が27.27%として、女性は男性より抑うつ傾向が高い結果が示されている。

ほかにも女性は男性よりストレス反応が高いという報告はある。7520名を対象とする松山ら(2020)の「新型コロナウイルス感染症に関するメンタルヘルス全国調査」によると、感染症拡大によるストレスは、女性で、高齢になるにつれて高まるという。1200名を対象とする元吉(2021)の調査は、感染流行地域に住まうかどうかによらず、女性は男性よりも感染不安が「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」に関連する程度が高いと報告している。一方で、橋本(2020)の調査は135名の大学生を対象にストレス反応には性差がなかったとし

ており、コロナ禍で直面する問題は人々が等しく共有しているわけではなく、むしろ各々の事情によって多様であるとして、コロナ禍におけるストレスの複雑性という視点から考察している。コロナ禍でのストレス反応による性差を理解するには、今後の研究の蓄積を待つ必要があるが、調査時点での世の中の感染状況、生活状況(暮らし、学業への取り組み、経済、人間関係など)などストレス反応を形成する上での複合的な要因を考えなければならぬであろう。

具体的な大学生の悩みとしては、コロナ禍1年以上を経た文部科学省調査(2021)によれば、「将来のキャリアに関する悩み」が回答者の7割を超え「経済的な状況」「授業等」「学内の友人関係」が続き、将来への不安が増加していることがうかがえる。約7600名を対象にコロナ禍1年半経過したアンケート調査(全国大学生生活協同組合連合会, 2021b)によると、「将来に対する不安」は回答者の6割を超え、「意欲がわかず無気力に感じる」「気分の落ち込み」「友人とつながれていない孤独感・不安」が後を追う結果となっている。

このように、コロナ禍に突入した直後から時間が長引くにつれて、新型コロナウイルス感染症による生活の変化はストレス反応を高め、大学生のメンタルヘルスの悪化へと影響が見受けられる。特に女性にその傾向が高い可能性がある。そのため各大学は、感染状況の推移を見守りながらも、時期に合わせて、大学生をいかに支援できるか検討する必要がある。

日本大学国際関係学部および短期大学部は、日本大学16学部・短期大学部の中でも講義形式の授業形態が多く、さらに教室定員を超える受講生が存在する科目が多いことから、一部の演習を除いて全面的にオンライン授業を展開してきた。特に、2021年に2年生となった大学生は、入学式が一年越しとなり、対面オリエンテーションや部活サークル勧誘などにも触れられず、孤独な大学生活を開始せざるを得なかった人が多い。なかには、長引く遠隔授業で、キャンパスから離れた地方に在住のまま、大学での学びを開始し、その期間が1年半以上に及ぶ学生もいる。

1年以上を超えたコロナ禍のキャンパスライフ

において、本学国際関係学部および短期大学部三島校舎の学生はどのようにストレスを受けているのか、個々人はどのような思いを抱いているのか。これらを探索的に検討することは、今後も継続が予想されるコロナ禍において大学構成員が一丸となって対処する学生支援の方向性、そしてこれまでと異なる支援の必要性を探ることになるのではないかと考える。

そこで本研究では、新型コロナウイルス感染症拡大状況下における本学学生のストレス状況を把握し、現状への思いを自由記述形式でとらえ探索的に検討することを目的とする。

2. 方法

2.1 調査対象者と調査期間

本学国際関係学部・短期大学部在籍中の1年生～4年生まで361名のうち、出身国が日本であり、男女の区別への回答、自由記述欄への回答があった233名の中から記述内容を「特になし」とした3名を除く230名を対象とした。留学生を分析対象としなかったのは、日本語による自由記述内容を分析対象としたからである。

内訳は、男性103名、女性127名、合計230名で、平均年齢は 19.29 ± 0.71 歳であった。学年の構成は、大学(短期大学)1年生113名、大学(短期大学)2年生31名、大学3年生64名、大学4年生22名であった。

調査期間は、2021年4月～7月であった。

2.2 調査内容

目的に沿って、新型コロナウイルス感染症の影響による生活変化とストレスに関する質問紙調査を行った。

使用した尺度は、表1のとおりである。なお、

表1 質問紙の構成

1	生活変化に関する質問項目
2	文化的自己観尺度(高田, 1999)
3	相互独立的-相互協調的自己観尺度(高田他, 1995)
4	心理的ストレス反応尺度(松浦・勝岡・脇, 2012)
5	自由記述(文字数制限なし)
(「新型コロナ感染症による生活変化について今感じること」)	

表1のうち、1. 2. 3. 4. の質問紙は、「大学生における新型コロナウイルス感染症による生活変化とストレス(1)」(伊坂・有木, 2022)において報告する。今回の分析には4. 5. のみを使用したため、以降はそれらの項目のみ記載する。

2.2.1 心理的ストレス反応尺度

松浦・勝岡・脇(2012)が作成した「抑うつ感」「易怒感」「疲労感」「身体不調感」の4因子12項目からなる心理的ストレス反応尺度を使用した。

回答は4件法で、各項目に対して、心理的ストレス反応が高い順に4点、3点、2点、1点(「よくあてはまる」～「まったくあてはまらない」)を与えた。得点範囲は12点から48点であり、高得点ほどストレス反応が高いと判断する。

ストレス尺度は本邦においても数多く開発されているが、今回採用した尺度は少ない項目数から成り立ち、信頼性と妥当性が確認されているため、臨床現場で利便性を持つことが明らかとなっている(松浦・勝岡・脇, 2012)。そのため、被験者への負担を軽減し、なおかつ必要なストレス反応を把握できる目的のもと、本尺度を使用した。

なお、質問項目は表2のとおりである。

2.2.2 自由記述項目

「新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活にさまざまな影響を及ぼしました。日本で新型コロナウイルス感染症が問題になってから1年以上が過ぎました。あな

たが今、感じていることを自由に記述してください」という質問に文字数制限なしで回答を求めた。

2.3 倫理的配慮

対象者には、大学の講義(オンデマンド授業)において口頭および文書で研究計画を説明し、同意の得られた人が所定のGoogle Formへアクセスして個別に回答する形式とした。また、本調査は無記名で実施すること、データの取り扱い、対象者の自由意志による協力および中止・撤回の権利、個人情報保護について説明した。

2.4 分析方法

分析には、SPSS Ver.25およびKH Coder ver 3(樋口, 2021)を使用した。心理的ストレス反応尺度は、対応のないt検定を行った。KH Coderは樋口らが開発したフリーソフトウェアで、テキストマイニング(計量的テキスト分析)のためのツールである。計量テキスト分析とは、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析を行う方法」(樋口, 2021)であり、テキスト内容を定量的に要約でき、分析者の主観が入り込まないという特徴がある。KH Coderは形態素解析機能により品詞体系に沿って頻出語を抽出するが、表記の揺れや重複などがあるため、データに合ったMY辞書を作成の上、削除・修正など整理してデータの質を高めた。また、1語として抽出されないと考えられる「緊急事態宣言」「コロナ禍」「コロナうつ」「コミュニケーション」「パンデミック」の5語は前処理段階で強制抽出語に指定した。

分析手順は次の通りである。①心理的ストレス反応尺度の平均値の差を検定した。②自由記述内容について、対象者全体の総頻出語数と出現頻度、分析対象とする語と語のつながりを探る共起ネットワーク分析を行った。③心理的ストレス尺度得点の平均値を基に高群と低群および平均群(以下、ストレス高群、ストレス低群、ストレス平均群)に分類した。④ストレス群を外部変数とした対応分析(クロス集計の視覚化)を行い、各群に特徴的な語から、大学生の思いの特徴を検討した。

表2 心理的ストレス反応尺度の因子および下位項目(松浦ら, 2012)

因子	項目
抑うつ感	1 希望が持てない
	2 気持ちが沈んでいる
	3 ゆうつだ
易怒感	4 イライラする
	5 すぐかっとなる
	6 怒りを感じる
疲労感	7 作業を少ししただけで疲れる
	8 疲れてぐったりとすることがある
	9 だるい感じがなくなる
身体的疲労感	10 首筋や肩がこる
	11 目が疲れる
	12 頭が重かったり頭痛がする

3. 結果と考察

3.1 大学生のストレス反応について

心理的ストレス反応尺度(得点範囲12~48点)の合計得点および標準偏差は、 27.23 ± 8.94 であった。男女別に、合計および因子別得点の平均値と標準偏差を表3に示した。

男女間において、平均値の差の検定を行ったところ、女性(29.20 ± 9.05)は男性(24.82 ± 8.22)より有意に高い結果であった($t(228) = 3.81, p < .001$)。

また、抑うつ感($t(228) = 2.14, p < .05$)、易怒感($t(228) = 1.95, p < .01$)、身体不調感($t(228) = 4.13, p < .001$)、疲労感($t(228) = 4.12, p < .001$)とすべての因子で女性は男性よりも得点が高く、身体不調感、疲労感において差が大きかった。つまり、ストレス反応は男性よりも女性に高く出ており、女性はストレス反応がより身体症状に現れやすいことがうかがえた。対象者全体の得点は、松浦・勝岡・脇(2012)の対象者($n = 500$, 平均年齢42.86 $\pm$ 9.91)の結果と比べると、抑うつ感、易怒感、身体的不調感は低く、疲労感のみ高いが、女性対象者に絞ると身体的不調感、疲労感が高い傾向を認める。コロナ禍では、女性で、高齢になるにつれてストレスを感じる割合が高まっている(松山ら, 2020)とするとすれば、本研究の女子大学生の結果は若齢でストレス反応が高くなっている可能性がある。コロナ禍で女性のストレスが高いことは、先行研究でも指摘されているが(松山ら, 2020; 元吉, 2021)、年齢層によって異なるかどうかについては、さらなる検証が必要だと考えられる。

また、コロナ禍における大学生の不安とうつとの関連性において、男性は「経済的不安」と、女性は「自粛生活不安」とうつとの間が特に強く関連する(藤井, 2021)と指摘されているように、女

性は日々の生活変化の影響を受けやすく、自粛が求められる制限のある生活では、外出や他者との交流が減り文字通り身動きが取りにくくなっている可能性が考えられる。それだけに、コロナ禍で十分な交流ができないことの影響が、心身への負担という形で生じた可能性が考えられる。女子大学生へのサポートとしては、大学において多様な交流の場を設定し、繋がりを形成するネットワークが必要なかもしれない。

3.2 自由記述からみる大学生の思いの特徴

3.2.1 全体傾向の結果

自由記述内容において、どのような言葉が何度使われているかを知るため形態素分析を行った。対象者230名の総抽出語数は13,208語であり、そのうち分析対象となったのは5,139語であった。

対象者全体における頻度の高い抽出語の上位30位を表4に示した。もっとも高い語は「コロナ」124回であり、「思う」123回「授業」78回「感じる」76回「人」64回「自分」61回「生活」61回「早い」56回「今」48回などが続いた。「コロナ」「思う」が多い結果であるものの、「授業」「生活」

表4 対象者全体における頻度の高い抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
コロナ	124	感染	44	不安	25
思う	123	オンライン	43	増える	23
授業	78	大学	36	マスク	20
感じる	76	ウイルス	32	ワクチン	20
人	64	時間	32	対策	20
自分	61	状況	31	機会	19
生活	61	新型	29	出来る	19
早い	56	対面	27	変わる	19
今	48	考える	26	多い	18
友達	47	行く	25	自粛	16

表3 心理的ストレス反応得点の結果

	全体 (n=230)		男性 (n=103)		女性 (n=127)		$t(228)$
	M	SD	M	SD	M	SD	
抑うつ感	6.72	2.92	6.26	2.89	7.09	2.91	2.14 $p < .05$
易怒感	5.37	2.40	5.03	2.30	5.65	2.44	1.95 $p < .01$
身体不調感	7.28	2.80	7.06	2.62	8.53	2.73	4.13 $p < .001$
疲労感	7.87	2.78	6.47	2.54	7.94	2.84	4.12 $p < .001$
ストレス反応合計	27.24	8.94	24.82	8.22	29.20	9.05	3.81 $p < .001$

「自分」「人」など、大学生の学びと生活へ思いがめぐらされていることがうかがえる。

次に、抽出した語と語の共起性や関連性を分析するために、共起ネットワーク分析の結果を図1に示した。図1は出現パターンが類似した語の結びつきの強さを可視化したもので、比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって示す「サブグラフ検出」(樋口, 2021)がされている。図1の円の大きさは語の出現頻度を表し、Jaccard係数^{*1}で測定した共起関係が強い語は、同じサブグラフ内では実線で異なるサブグラフ間では破線で結び、それぞれの関連性を示している。

対象者全体の共起ネットワークは、8つのサブグラフが形成され、共起の程度の強い語が線で結ばれた。出現した語は、①「今」「自分」「感じる」「考える」「正直」「良い」「行動」「意識」「緊急事態宣言」「出る」②「新型」「コロナ」「ウイルス」「感染」「環境」「変わる」「戻る」「生活」「思う」③「関わる」「人」「機会」「減る」④「時間」「意見」「増える」「前」「会う」⑤「大学」「授業」「対面」「オンライン」「受ける」「大学生」⑥「友達」「出来る」「会える」「辛い」⑦「早い」「収束」「終息」「願う」⑧「旅行」「行く」「予定」であった。図1の各サブグラフ内の語のつながり、サブグラフ外とのつながりを検討したところ、以下のテーマを読み取ることができた。「新型コロナウイルス感染症により生活が変わったこと」、「緊急事態宣言が出て行動を

意識していること」、「人と会い関わる機会が減り、大学で受けるオンライン授業では友達が出来ず、友達に会えずに辛いこと」、「旅行に行く予定が立たないこと」、「早く生活が戻るよう終息(収束)を願うこと」、が大学生の思いとして浮かび上がってきたと考えられる。

ほとんどの授業がオンラインで実施され、他者との交流はzoomやSNSなどで行われてはいるものの、コミュニケーションとしては局限されたものにならざるを得ない。そして、改めて大学が学びの場であると同時に、友達との交流の場であることが知られる。外出自粛が求められ、感染への不安や恐怖など、それらを他者と共有する機会さえ限られている状況で予定の立たない、立てられない心境がうかがえた。

3.2.2 心理的ストレス反応尺度得点別の結果

心理的ストレス反応尺度において、平均値(27.24点)を基準として、 ± 1 SD (8.94)を超えた36点以上をストレス高群(n=44)、18点以下をストレス低群(n=47)、1 SDの35点～19点をストレス平均群(n=139)として3群に頻度の高い頻出語の上位10個を表5に示した。

ストレス高群では「コロナ」「感じる」「人」「授業」「思う」「早い」「大学」「自分」「生活」「ウイルス」「今」「時間」「友達」、ストレス低群では「コロナ」「思う」「生活」「授業」「感じる」「オンライン」「自分」「友達」「今」「早い」、そしてストレス平均

表5 ストレス高群・平均群・低群における頻度の高い抽出語

ストレス高群 (n=44)		ストレス平均群 (n=139)		ストレス低群 (n=47)	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
コロナ	23	思う	74	コロナ	39
感じる	21	コロナ	60	思う	34
人	19	授業	41	生活	28
授業	17	感じる	38	授業	20
思う	15	人	37	感じる	17
早い	14	自分	34	オンライン	14
大学	14	早い	31	自分	14
自分	13	感染	26	友達	14
生活	12	今	26	今	12
ウイルス/今/時間/友達	10	友達	23	早い	11

* ストレス高群10位は4語が該当した

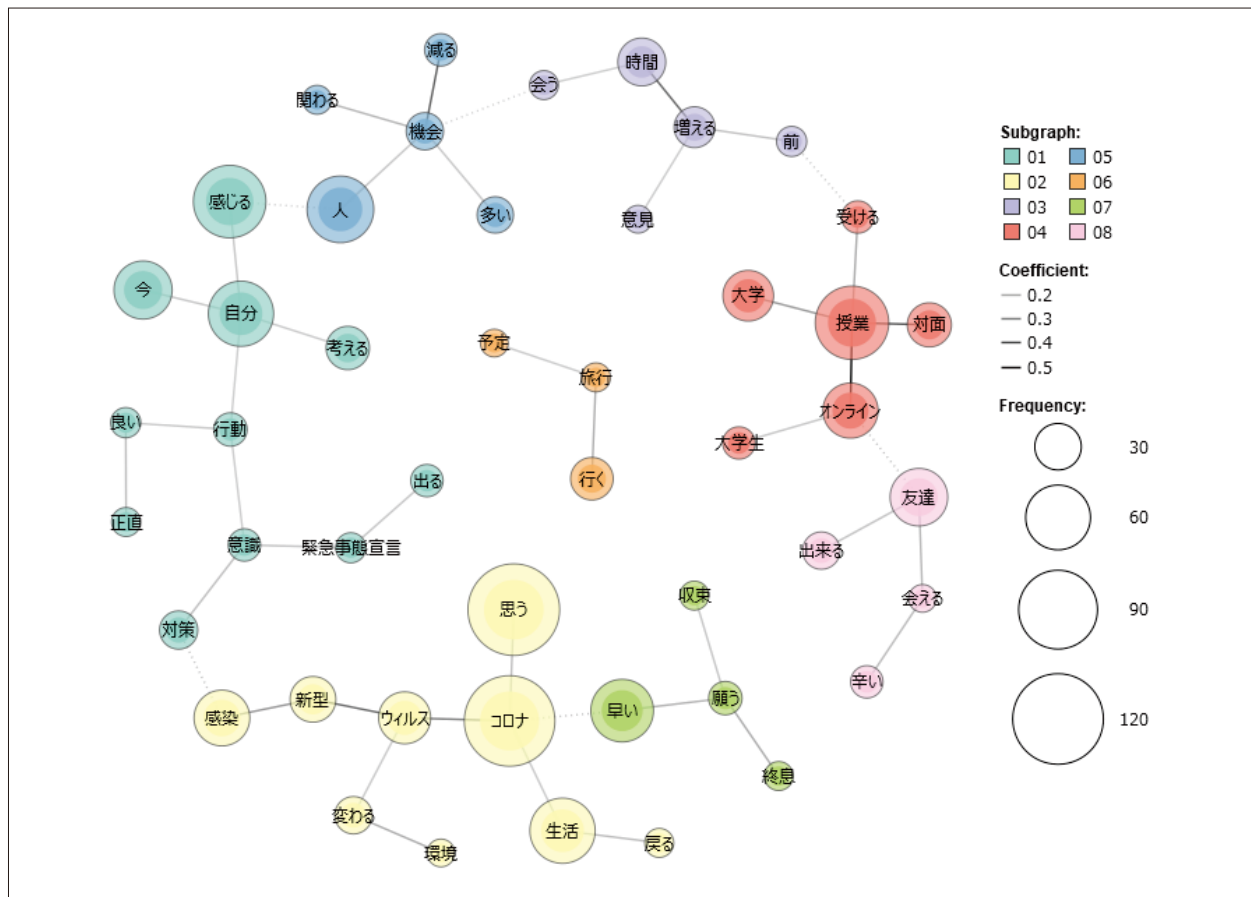


図1 対象者全体 (N=230) の共起ネットワーク図

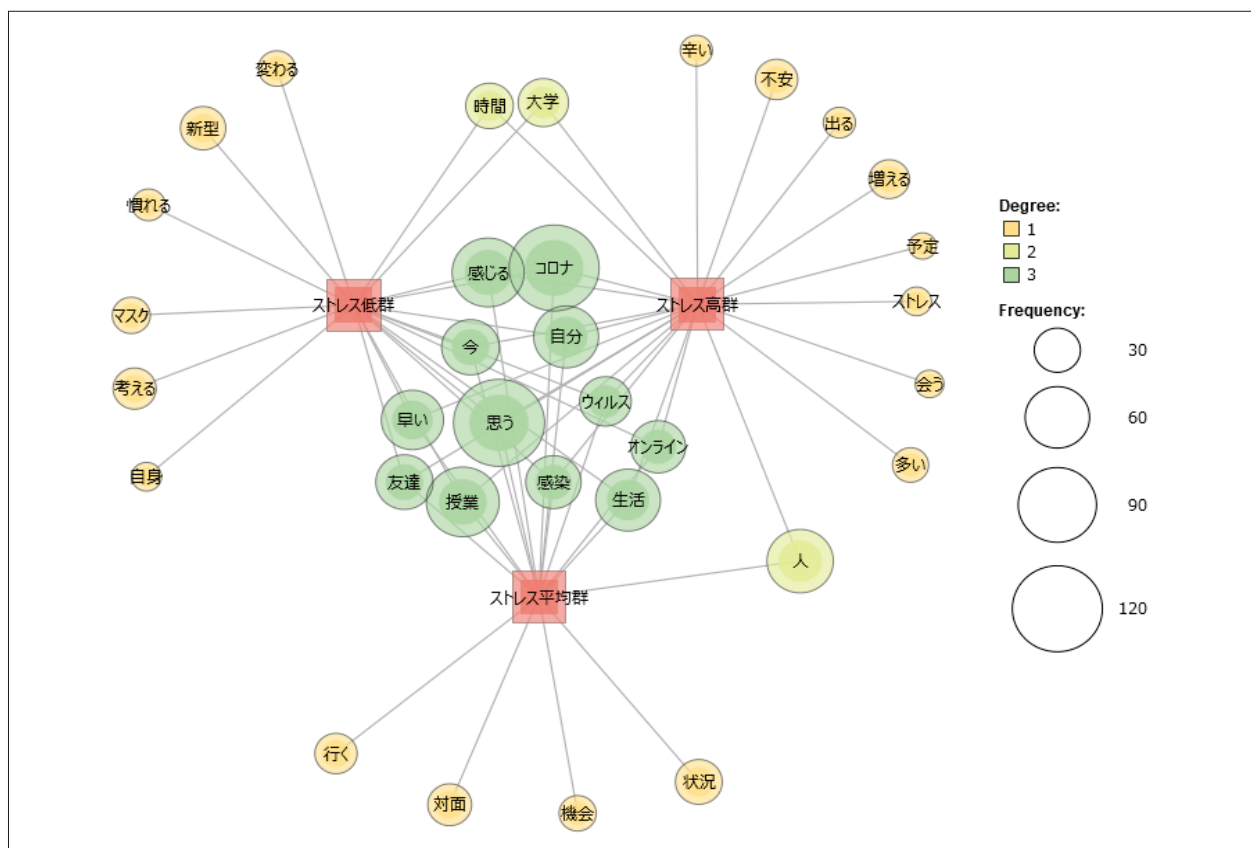


図2 ストレス高群・平均群・低群と語の共起ネットワーク

群においては「思う」「コロナ」「授業」「感じる」「人」「自分」「早い」「感染」「今」「友達」が抽出された。3群に分けて頻出語を比べてみても、群により生じる語の特徴は明確でなかった。

そこでストレス反応の3群を外部変数として、各群特有の出現パターンを探るために、語と語の関係を描く共起ネットワーク分析を行った。結果は図2に示したとおり、強い共起関係ほど線は太く、出現数の多い語ほど円が大きい。図2において、ストレス高群、ストレス低群、ストレス平均群と記した四角に囲まれている語は、3群に共通しており、周りに布置する語は、各群に特徴的にみられる語である。3群に共通する語は「コロナ」「ウイルス」「感染」「今」「思う」「感じる」「授業」「オンライン」「生活」「自分」「友達」「早い」であった。これは表6の頻出語で見られた内容とほぼ同様であり、ストレスの高低によらず共起しているものと理解できる。コロナ禍における生活変化として、授業がオンラインになっていることや友達

との関わりについて大学生は思いを巡らせていることが推察される。また、それぞれの群で特徴的に出現する語として、ストレス高群では「不安」「ストレス」「予定」「辛い」「出る」「多い」「増える」「会う」、ストレス低群では「新型」「マスク」「自粛」「自身」「考える」「変わる」「慣れる」そしてストレス平均群においては「対面」「機会」「状況」「行く」が示された。

さらに、ストレス反応群を外部変数とした対応分析を行った。対応分析はクロス集計を視覚化し、基本的に2つの項目あるいは変数を一緒に集計して関連性を分析する手法である(牛澤, 2018)。ストレス高群・ストレス低群・ストレス平均群と特徴語の関連性を分析した結果を図3に示したところ、ストレス反応群別に、3方向に分かれて語が分布した。原点周辺に集まる語は出現パターンに特徴がないものの、それぞれの方向に原点から離れて布置する語ほど強い特徴があるとされている。したがって、ストレス高群では「ストレス」「予

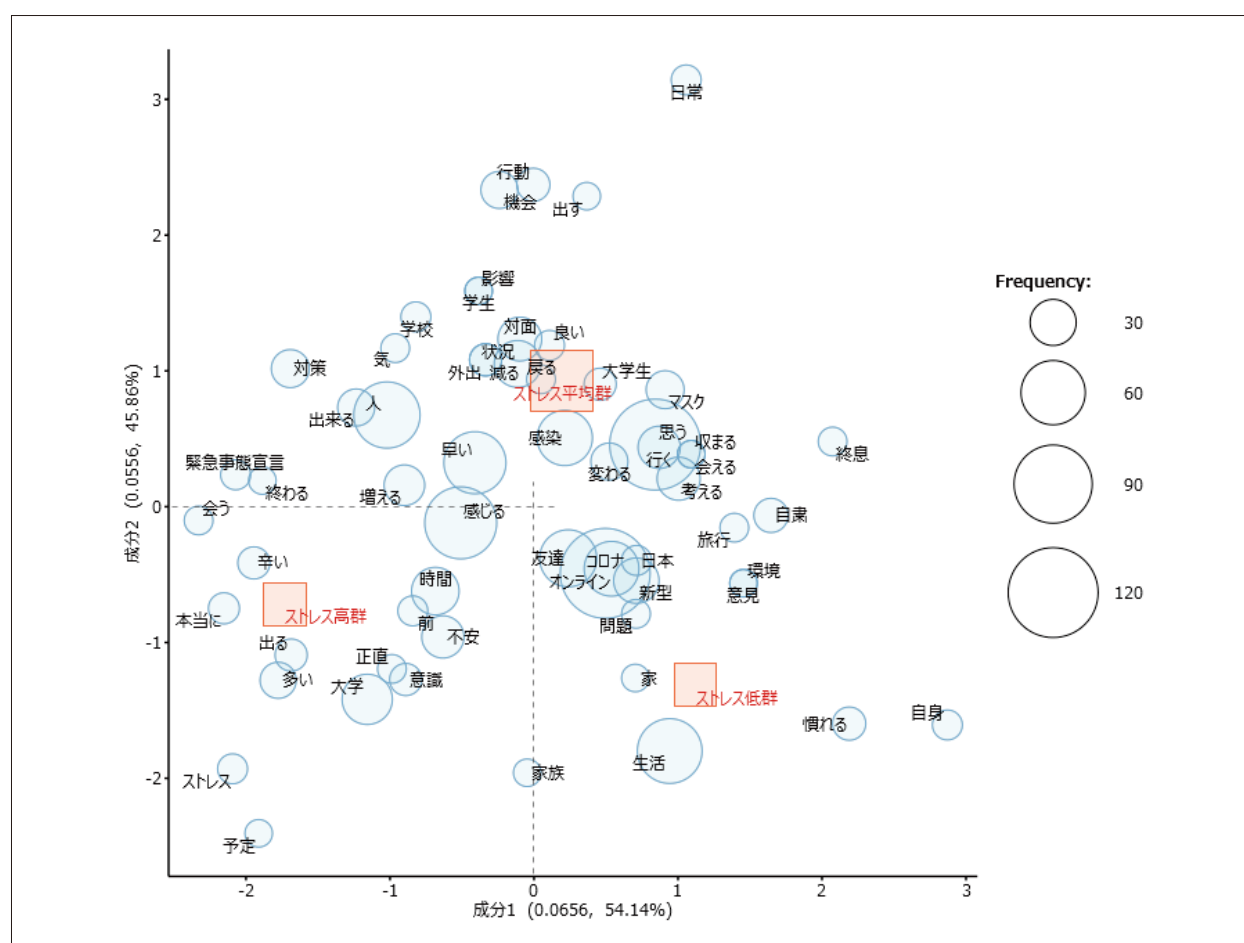


図3 ストレス3群を外部変数とした特徴語の対応分析

定」、ストレス低群では「自身」「慣れる」、ストレス平均群においては「日常」がそれぞれを特徴づける語と解釈することができる。

そして、寄与率の高い成分1の位置関係をみると、ストレス低群とストレス平均群の距離は近く、この2群とストレス高群は距離が離れて布置されており、ストレス高群の内容は他の2群とは異なっていることがうかがえた。また、ストレス高群には女性が多く(男性9名、女性35名)、ストレス低群には男性が多い(男性26名、女性21名)ことが示されており($\chi^2(1) = 11.67, P < .001$)、ストレス反応の高い女子大学生は、「予定」と「ストレス」に強く関心を寄せている可能性がうかがえる。「予定」は将来を想像させるキーワードである。この点が、ストレス高群の学生にとって、先行きの見えない曖昧で不確実性の高い現状において意味を持つと考えられる。

一方、ストレス低群では、「自身」「慣れる」という語が示された。これは、男子大学生の方がやや多い結果であったが、現状の受け止め方の違いを示している可能性がある。低群の学生は同じ状況に直面していても、受けとめ方や焦点づけ方が異なると推察される。この姿勢は、コロナ禍で制限があり、先行きの状況が見えない中で感じるストレスの程度に影響を及ぼしている可能性があるのではないだろうか。

本研究の結果から大学生の思いとしては、コロナ禍での自粛制限やオンライン授業、友達に会えない、旅行に行けないなど、共通して現れるものがあるが、ストレスを高く感じている人には「予定」「ストレス」という語が、ストレスを低く感じている人は「自身」「慣れる」がそれぞれ特徴的である点は興味深い結果である。自身が慣れるということからは、ワクチン接種や感染対策など、自分自身が可能なことに取り組む一方で、先行きの見えなさという不確実性に耐える姿勢が垣間見られるように思われる。

大学生活を営む上で、感染予防策を徹底させながら感染状況の推移に合わせて不確実性に耐えるためには、情報共有の在り方、情報の受け止め方、対処の仕方など、話し合える対人交流の場があるとストレスの高い女子大学生への支援につながる

かもしれない。同時にストレスの低い男子大学生には、現状を受け止める姿勢が見受けられるが、経済的不安に対する対処法の共有が支援につながるかもしれない。

4. おわりに

コロナ禍に入ってから1年数カ月程度の大学生のストレス状況と思いについて調査した。結果は、男子学生よりも女子学生のストレスが高く、とりわけ身体不調感、疲労感として出現していることが明らかになった。また、大学生の思いとしては、コロナ禍での自粛制限やオンライン授業、友達に会えないなど共通して出現するものもあるが、ストレス高群には女性が多く、将来を想像させる「予定」と「ストレス」への思いがあること、ストレス低群には男性が多く、「自身」が「慣れる」への思いがあることが特徴的に認められた。

コロナ禍で強いられる生活状況をどのように受け止めるかの違いが、ストレスの程度を分けた可能性が考えられる。加えて、コロナ禍におけるストレスの複雑性を考え合わせると、今後も感染状況の推移に注目しながら、大学生の思いがどのように揺れ動くかに目を配らなければならない。先行きの見えない不確実性に対して、どのように耐えられるかを支援することは、学生支援の一つの方向性となる可能性がある。知見を集めて、必要な支援策を検討することが課題である。なお、本研究の問題点として、着目した特徴語にさらなる分析を進めるには該当データ数に不足があった。今後はデータを集積し、新たなコーディングルールで詳しい分析を行いたい。

謝辞：本調査のご協力くださった日本大学国際関係学部および短期大学部学生の皆様に心より御礼申し上げます。

注釈

* 1 Jaccard係数とは、語と語が同じ文書の中で用いられた数をどちらかの数で割って基準化したもので、語と語のつながりの強さを測るものである。KH Coderでは、標準的に使用されている。

文献

- 橋本剛 (2021)：コロナ禍初期における大学生の心理社会的ストレスに関する探索的検討：社会規範としての援助要請スタイルの効果も含めて 人文論集 71(2) pp15-34.
- 樋口耕一 (2021)：社会調査のための計量テキスト分析【第2版】内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版
- 藤井義久 (2021)：新型コロナウイルス感染症が大学生に及ぼす心理的影響：COVID-19感染拡大不安尺度開発に向けた予備的検討 岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター研究紀要 1、pp195-204.
- 梶谷康介・土本利架子・佐藤武 (2021)：新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) パンデミックが大学生のメンタルヘルスに及ぼす影響：文献および臨床経験からの考察 健康科学 43、pp1-13.
- 松浦紗織・藤岡大貴・脇龍平 (2012)：成人を対象とした心理的ストレス反応尺度の作成－信頼性と妥当性の検討－大阪経大論集 63(3) pp193-200.
- 松山藍利・翠川晴彦・高橋あすみ・田口高也・小川貴史・白鳥裕貴…太刀川弘和 (2020)：新型コロナウイルス感染症に関わるメンタルヘル

スに関するアンケート調査 最終結果の公表. 筑波大学医学研究系臨床医学域 災害・地域精神医学 <https://plaza.umin.ac.jp/~dp2012/covid19survey.html> (2021.10.18accessed)

- 文部科学省 (2021)：新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査 https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (2021.10.18accessed)
- 元吉忠寛 (2021)：新型コロナウイルス感染症による人々への心理的影響 社会安全学研究 11、pp97-108
- 全国大学生生活協同組合連合会 (2021a)：第56回学生生活実態調査の概要報告 <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>. (2021.10.18 accessed)
- 全国大学生生活協同組合連合会 (2021b)：届けよう！コロナ禍の大学生生活アンケート集計結果報告 https://www.univcoop.or.jp/news_2/news_detail_1972.html (2021.10.18 accessed)
- 牛澤賢二 (2018)：やってみようテキストマイニング 自由回答アンケートの分析に挑戦！ 朝倉書店
- 渡邊慶一郎 (2020)：コロナ蔓延期の学生のメンタルヘルス (特集COVID-19に伴うメンタルヘルスの諸問題) 臨床精神医学 49(9) pp1531-1536.